

演題名：犬の腹部大動脈血栓塞栓症の5例

発表者氏名：○大池三千男¹⁾ 遠藤千尋¹⁾ 山村知香¹⁾ 寒川彰久²⁾ 古林与志安²⁾

発表者所属：おおいけ動物病院・帯広 2) 帯畜大・病態獣医

はじめに：昨年我々は、非アテローム性動脈硬化と診断した犬の腹大動脈血栓塞栓症の1例を報告した。その後4症例、計5症例の犬の腹部大動脈血栓塞栓症を2年間に経験したので、その概要を報告する。

症例1：雑種犬、雄、未去勢、12歳、体重12.7kg。右後肢の跛行を主訴として来院した。股動脈は徐々に閉塞していったが、ワルファリンを使用しない治療で臨床症状は改善し、歩行はほぼ正常に回復した。その後徐々に腎不全が悪化し、第227病日に死亡した（治療開始より約7ヶ月半後）。死因は腹大動脈分岐部から腎動脈まで続く血栓塞栓であった。

症例2：雑種犬、雄、未去勢、11歳、体重12.2kg。1週間前から右後肢の跛行が徐々に悪化し、来院した。右後肢の体表温度は低下し、右股動脈拍動微弱、血栓塞栓症と診断した。ワルファリン投与を開始し、現在約11ヶ月間治療継続中。

症例3：シェットランド・シープドック、雄、去勢済み、15歳、体重14.5kg。右後肢の跛行で治療していたが、2ヶ月後に右股動脈の拍動が認められなくなり、血栓塞栓症と診断。ワルファリン投与を開始し、現在約12ヶ月間治療継続中。

症例4：ポメラニアン、雄、11歳、体重5.3kg。2日前からの起立不能と多飲多食を主訴に来院。両後肢体表温度低下、両股動脈触知不能、両後肢深部痛覚消失し、虚脱状態だった。副腎皮質機能亢進症に起因した血栓塞栓症と診断した。治療により右股動脈は疎通し、食欲も回復。退院時よりワルファリン投与を開始したが、その後の治療を望まなかった。

症例5：シベリアン・ハスキー、雄、未去勢、11歳、体重39.0kg。3日前からの右後肢跛行を主訴に来院した。腹圧膨満、右後肢体表温度低下、右股動脈は触知出来なかった。副腎皮質機能亢進症に起因した血栓塞栓症と診断した。両疾患の治療を開始するが、継続的な治療は出来なかった。しかし、7ヶ月後の現在一般状態は改善されている。

考察：症例1は、犬の血栓塞栓症は歩行可能な臨床状態であっても、さらに血栓塞栓は進行、腎動脈まで閉塞し、腎不全で死亡する事を示唆した。症例4と5は、副腎皮質機能亢進症に起因した血栓塞栓症であった。両疾患の治療は飼い主の負担が大きく、継続治療が出来なかった。副腎皮質機能亢進症に起因した血栓塞栓症の併発を再認識すべきと思われた。症例2、3、5は、ワルファリン投与により血栓塞栓症の進行を遅延させる事が示された。しかし、INRの変動は大きい為、定期的なモニターや出血等の副作用に十分注意すべきと思われた。